

令和5年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立栄小中学校		本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	①授業改善に取り組む。 【指標】学調・みえスタディ・チェックの結果分析で明らかになった課題に全学年で重点的に取り組む。 【目標値】課題となった問題の正答率を上げる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学調調査、みえスタディ・チェックの結果から、読解力、条件をつけて書く力、資料の読みとりの力の育成が課題である。 ・全教職員が日常的に授業公開や意見交換して教材研究などに取り組んだ。 ・児童アンケート(昨年度比)では、「国語や算数の勉強が好きですか」の項目で、二極化がみられる。 ・図書館利用状況は、11月末において総貸出数は5525冊であった。図書巡回指導員や読み聞かせボランティアの活用により読書活動を活性化できている。 ・児童アンケート「本を読むのが好きですか」の項目で、否定的回答が減少した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語では、作者の気持ちを述べる問題に対して苦手意識がある子が多いように思う。 ・「よむよむワークシート」はわかりやすく取り組みやすい。 ・個々の目標を提示して、児童の能力に寄り添った推進を考えてほしい。 ・長文を読むための文章の構成などを指導すると、高学年・中学校へつなげていきやすい。 ・特に算数の文章問題で読解力の弱さを感じる。イメージができるように取り組んでほしい。 ・算数は、高学年までに「わからない」がなくなるような指導が必要。 ・授業中に学級が静かではない場合があるようなので、授業環境の見直しをしてほしい。 ・授業の様子を公開し、教師力を高めることは素晴らしい。継続してほしい。 ・自分自身、本を読んでいる姿を見ることができていないのが反省点である。 ・親子ふれあい読書は取り組んでいる。ノーマディアの項目に読書を組み込むのはいかがでしょうか。 ・読書活動を今後も活性化してほしい。読み聞かせボランティアはとてもありがたい。子どもたちが良い本に興味を持ち、読書時間が増えることを期待している。 ・図書館利用は、興味のある本だけを借りる傾向があるため、利用を強化するだけでは、国語力の弱さはクリアできないと思う。 ・朝、授業が始まる前に5分間読書をする時間を作って継続して欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態把握に努め、教材・教具など授業改善、学習に集中できるような環境整備に努める。 ・教職員それぞれが授業を公開し積極的な意見交換を行う。授業規律を統一して取り組む。 ・読解力や書く力を高めるための授業力向上やICT活用の研修を行う。 ・ノーマディアの取組で、家庭学習と読書を結びつけた啓発をさらに進める。 ・図書巡回指導員や読み聞かせボランティアを今後も活用し、読書の楽しさや、習慣を身につけさせたい。
	②授業力を向上させる。 【指標】授業公開を行い、意見交換をして授業力を高める。 【目標値】全教職員が公開授業を行う。			
ICTの活用	①効果的なICT活用を目指し、教師のスキルアップのための研修会を実施する。 【指標】研修を通して効果的な活用方法や、今後の具体的な方策を見出す。 【目標値】研修会を各学期1回以上実施。	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT支援員を活用してのミニ研修会や教員によるICT研修の還元を各学期に2回以上実施し、教職員のスキル向上を図った。 ・毎日1回以上、児童が端末を利用する時間を設け、考えの交流などを学年に応じてできるようになってきた。 ・低学年からローマ字入力に取り組み、短い文を入力できるようになってきた。高学年は入力速度が向上しつつある。 ・学年に応じてパソコンの持ち帰りをし、予習復習や調べ学習などに活用することができた。 ・日常的に文房具のように使えるようになるためには、今後も効果的な利用場面や教材等についての研究や研修が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業参観の時に、子どもたちが発表資料を短時間で作成していて驚いた。先生方が教えていただいているからだと感じた。 ・毎日クロムブックを持ち帰っているが、重さが負担になっている子もいる。家庭学習で使わない教科書やノートは学校に置いていけるようにするとよい。 ・家でも使用する時間が増えた。タイピングの練習もアプリを活用し、楽しく練習している。 ・プログラミングや調べ学習なども積極的に活用してほしい。 ・ICTを文房具のように使えるようになることは非常に重要。大切にしまひ込まずに、不具合への対策をしっかりと整えて気軽に利用できるように。 ・休んでいる児童がリモートで授業に参加できるのは良い。 ・教職員のスキルアップのため、研修を継続するのは良いことである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人のスキルを共有していくために、今後も研修会を積極的に実施し、取組を交流しながら授業での効果的なICT活用を検証していく。 ・出席停止児童のオンライン授業活用は日常的になるつつある。不登校児童の学力保障としての利用も継続する。 ・ICT支援員に活用方法を相談をし、授業に取り入れる。
	②授業において、学びの質を上げるためのICT活用を推進する。 【指標】効果的な場面や方法等について教師自身が学び、児童が使えるようにする。 【目標値】毎日1回以上、児童の端末利用。			
長欠減少	①クラスづくり・仲間づくりを進めて不登校等の長期欠席の未然防止に努めるとともに、日常生活の様子に気になる児童の情報を職員間で共有し、早期対応を行っていく。 【指標】情報共有 【目標値】職員会議後には毎月1回以上、児童の情報共有の機会を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に行きづらい子に対して、先生や友だちが配付物を持ってきて優しい言葉をかけてくれるなどの繋がる機会を先生がつくってくれているので、救われた子もいる。ぜひ継続を。 ・様々な事情での欠席に対して、理解を深められる時間をクラスでもってほしい。 ・「学校にいかない君が教えてくれたこと(今じんこ著)」という本を考え方の一つとして多くの人に目を通してもらいたい。 ・毎日元気に登校する子どもの姿を見てうれしく思う。子どもの変化に気づき、早く対応していただけることに感謝している。子どもの気持ちに寄り添った対応を今後も続けてほしい。 ・中学校区の補導会議で、子どもたちの様子や保護者に対する対応等を聞く機会がある。頭が下がる思いである。 ・長欠児童の減少は喜ばしいが、「みんな違ってみんないい」をどう教えればよいか難しく、先生の大変さがよくわかる。 ・デジタルツールで児童と相談員が繋がればさらに問題解消されるかもしれない。 ・対応方法を相談できる機会があることを評価する。続けてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全教職員で行う月一回の支援会議だけでなく、普段から放課後など職員室で児童の様子を交流しているので、今後も続けていく。 ・学級だけでなく学校全体で対応が必要な場合には、早期に校内委員会を開いて体制を整える。 ・学校だけの対応では難しい場合は、関係機関と連携をとって対応していく。 ・校内での教職員研修だけでなく、講師を招いたり外部の研修を受講したりし、より児童理解を深めていく。 	
	②児童とつながる機会を確保する。 【指標】家庭訪問や学習会 【目標値】毎月1回は家庭訪問や学習支援の機会を持つ。			
地域連携	①鈴鹿型コミュニティスクールの推進 【指標】学校支援ボランティアの活用 【目標値】宿題チェックは毎日、読書は定期的、その他は各学期1回以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの皆さんに感謝している。子どもたちから話をよく聞く。 ・学習支援ボランティアが来てもらえることは、先生方の負担も減らすことができ、その分、子どもたちへの目配りができる画期的な活動である。 ・学校や先生方のサポートについて、先生方が子どもたちの学習の理解度を把握してもらうことが必要。 ・ボランティアや地域の方への体験活動などのクラス規模の公開授業だったら個々に交流ができるかもしれないが、音楽会や集会だと、参観になってしまう。 ・地域連携はそれなりに進められていると評価できる。継続を。 ・ホームページについて、学校生活の精力的に更新をすると閲覧する人も増えると思う。ボランティアが携わることもできるかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間を通してボランティア内容と時期を示したリストを用いて、有効だったボランティア活動の内容を職員間で引き継ぎ、各学年で活用する。 ・ホームページを閲覧してもらえるよう、学校生活やボランティア活動の紹介を積極的に更新する。 	
	②地域の人に児童の様子を知らせ、連携をはかる 【指標】学校行事や授業の地域の人への公開、教育活動の情報発信 【目標値】年間3回の行事や授業の公開・月2回以上、ホームページによる情報発信			
人権教育	①自分や他者を大切にできる態度や差別や偏見をなくしていくこととする実践力の育成 【指標】教職員の児童理解力の向上、学級の人権課題解決を意識した仲間づくり(レポート研修年2回) 【目標値】教職員の児童理解力を高めるために外部講師を招いた研修会を適宜開く。 「学校に行くのは楽しい」「学校で友だちに合うのは楽しい」と回答する児童が増える。 「自分には良いところがある」と回答する児童が増える。	<ul style="list-style-type: none"> ・親や先生に対して、話を否定せずに聞いてほしい、決めつけず気持ちをわかってほしいと思っっている子が多いと思う。 ・「学校に行くのが楽しい」「友だちと会うのが楽しい」と思える子どもが増えたことをとてもうれしく思う。 ・人それぞれの違いを認め合うことができれば、自尊感情も高まっていくと思う。 ・どんな小さなことでもほめることは子どもの自信につながる。家庭や学校が共に心がけ、自己肯定感を高められる取組をしていきたい。 ・自己尊重について、細かい事例では個人差が本当に大きい。 ・「皆は一人のために、一人は皆のために」を心に根付かせるにはかなりの経験が必要。疑似体験を積ませる方法が課題。 ・他国の子どもたちのことを知る指導を続けてほしい。 ・教職員の児童理解力向上に向けて、年4回も外部講師による講習を実施しており、高評価である。今後も継続を願う。 ・家庭でも平和について話しており、子どもが自主学習に取り組みやすいようにしている。興味を持つまでが大切。 ・平和教育については、非常に教えるにくいテーマである。現実世界を直視できる目を養えるように子どもたちを導いてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学級の人権課題解決のための仲間づくりに取り組んでいる。教師は、クラスにある人権課題を見抜く力・子どもも理解力をつけるために、また、一人ひとりの教師が自らの指導を人権的な視点で振り返るために校内研修をさらに活性化させる。 ・今年度、学級の児童の実態をもとに見直しした学年別人権教育カリキュラムを新担任の目で改めて見直ししながら、個別の人権問題解決に向けての取組をすすめていく。 ・一人ひとりの子どもの感じ方を考えながら平和学習の題材を選ぶ。 ・人権・平和について「もっと知りたい」と子ども自身が思えるような話題や問題の提示に努める。 	
	②平和教育 【指標】平和について考える取り組みを行う。(各学年、年1回以上) 【目標値】自主学習等の児童の主体的な学習を行っている学年で、平和に関するテーマが見られるようになる。			
生活指導	①いじめの防止・早期発見・解決に向けた組織的な取組 【指標】いじめについてのアンケート実施後のいじめない対応、学校全体での情報共有、保護者への啓発 【目標値】いじめについてのアンケートを学期に1回実施する、情報共有の機会を職員会議に位置付ける、学校だよりやホームページに三重県いじめ防止条例・栄小中学校いじめ防止基本方針を載せる、児童会がいじめ防止強化月間に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童会がいじめ防止強化月間は、子どもたちの意識が高まる良い取り組みだと思う。 ・いじめに対しては、小さな事柄を摘み取る教師の姿勢や見守りがあれば少なくなると思う。迅速な対応をお願いしたい。 ・登校時の問題で学校が楽しくないと思っている子もいるようである。 ・91%の児童・保護者があいさつができていたとの回答だそうだが、PTAのあいさつ運動では、あいさつができている子が少ないと感じた。投稿半や地域の人にあいさつができるとよい。 ・あいさつ運動に参加しているが、徐々にあいさつをする子が増えてきたと感じる。家庭での協力が重要。 ・中学校と連携してあいさつ運動を行うのは良いことである。 ・アンケートを実施することで、自分を見つめ直す良い機会になると思う。 ・アンケート結果だけでなく、保護者の様子や子どもの様子を聞くことが大切である。 ・家庭での会話やコミュニケーションの啓発を学校側からもお願いしたい。 ・ノーマディア運動は、子どもだけでなく保護者も意識して過ごせたので、今後も続けてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日々子どもたちの様子に気を配り、いじめ防止及び早期発見に努める。日常的に保護者と連絡をとり、家での様子を把握する。 ・児童の様子や対応について、教師間で速やかに共有し、保護者・関係機関と連携する。 ・SNSやインターネット使用による生活習慣の崩れやネットモラルなどについて、定期的な指導し、学ぶ機会を持つ。 ・ノーマディア運動、食育の指導は来年も継続して行う。 	
	②基本的生活習慣の定着 【指標】あいさつ運動、食育、健康教育、ノーマディア運動の推進 【目標値】あいさつ運動を実施する、各学年栄養教諭と担任による食育授業を計画・実施する、ノーマディア運動・家庭学習推進週間を中学校と合同で実施する(年3回)。			
特別支援教育	①児童の実態把握と個別の支援計画・指導計画の作成 【指標】定期的に保護者と協議し、個別の支援計画・指導計画の立案と見直しを行う。 【目標値】支援計画は年に1回以上見直し、指導計画は学期ごとで作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示物からたくさん活動されている様子がわかった。 ・支援学級理解の授業も行われており、とても良いと思う。 ・他の児童との関わり方や学校と保護者の考え方の相違等、日々先生方大変さが伺える。 ・年々充実していると思う。修正を加えながら進めてほしい。 ・「課題から児童不足や対応が多岐に渡っており苦労が伺える。周囲の理解と協力が重要。 ・特別な支援が必要な児童が増えている原因を学校全体で情報共有を図り、児童の学習環境を整えてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援学級籍の児童や支援を必要とする児童が増えている。限られた職員数の中で、どのような体制を組んで支援を行っていくかを考えていく。 ・保護者、幼稚園・保育所・こども園・中学校・学童保育所・放課後デイサービス・教育委員会・子ども家庭支援課などとの連携をさらに密にし、情報共有を図り、途切れのない支援を引き続き行う。 	
	②教職員間での情報共有 【指標】情報共有を図ることで教職員全員で児童を見守る。 【目標値】特別支援教育の校内委員会を月1回行う。毎月の職員会議で情報交換を行い、たより「あったか」を発行する。			
教職員の働き方改革	①時間外労働時間の削減 【指標】時間外労働時間【目標値】年間360時間超の職員0人、月平均1人あたり30時間以内	<ul style="list-style-type: none"> ・先生方がいつも遅くまで残って仕事をされている。ありがとうございます。 ・一人ひとりに向き合ってくださっている分、授業の準備に時間がかかっているのかもしれない。宿題の丸付け等、家庭で取り組めることを保護者も意識していくべきだと感じる。 ・それぞれの仕事を見える化し、進捗を把握しあってサポートするなど、一人で抱え込まずに仕事をしてほしい。 ・意欲や学力など教育の向上を考えると、先生方の負担が増えることは事実であり、働き方改革が後押しになってしまっているのではないかと懸念される。 ・生活指導は、ある程度は担任の必須であると思うが、日ごろから指導する専門職の配置があると思う。 ・極端だが、毎年同じ授業なら準備なしでも済む。評価基準を作成していく段階にきているのではないかと。 ・コロナ後で各種行事が復活していることから先生方の負担は増えていることと思う。以前と同じことをしなければと考えると、より省力できることや事業の縮小、取りやめも考えるべきである。 ・先生方の時間外勤務が減るように、管理職が積極的に先に帰る、帰宅を促す等していく。 ・仕事内容も多岐に渡り、多忙の中、子どもたちのために一生懸命ありがとうございます。先生方の体と心の健康もとても大切ですので、早期退校できるように努めてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・業務支援員の活用例を紹介し効果的な活用を促進することで、授業や担当業務の準備の時間を短縮する。 ・ICT活用による事務処理作業の簡略化のスキルを提案・実践していく。 ・業務の提案や教材研究のデータ・準備物を職員間で共有し、時間を有効に使う取り組みを強化する。 ・行事や取組等、教育のねらいを維持した上で、実施方法の見直しを検討する。 	
	②年休取得の増加 【指標】年休・特休取得日数【目標値】年間22日以上			
教職員の働き方改革	③定時退校日の設定と実行 【指標】定時退校状況【目標値】月2回の設定日の退校率90%以上	<ul style="list-style-type: none"> ・(時間外労働時間11月末の合計 昨年度188時間1人あたり23.5h→今年度196時間1人あたり24.5h) ・今年度も、昨年度と同様の休暇取得状況である。(休暇取得11月末の平均 昨年度16日→今年度16日)。10日は夏季休業日に取得したものである。授業日に取得は難しいが、取りたいときに休暇がとれるように声かけをしたり、学校体制を整えている。 ・定時退校設定日であっても、児童の取り組みの評価や翌日の準備は必要のため、教職員90%の実行は難しかった。一方で、定時退校率は少し上昇した。仕事に優先順位をつけたり、昨年度のデータや引継ぎ教材を活用する等、職員が効率よく業務にあたらうと努力しており、定時退校の意識が高まっている。(定時退校率昨年度70%→今年度78%)。 		
	④留守番電話での退勤時間以降の対応、スクール・サポート・スタッフの活用、行事実施方法の見直し等により4月～9月までは1人あたり21.8hと昨年度を下回ったが、11月に大きな行事があったこともあり、準備のため10月・11月は時間外労働時間が増加した。行事が終わっても、事務処理作業や日々の授業の準備等で時間外労働をしなければならないのが課題である。			